

あそび

2

2016





版画 武井石艸

百草園吟行句

蛇のみが知る裏山の梅が咲き 堀内一郎

梅は風で咲くもの風が人散らす

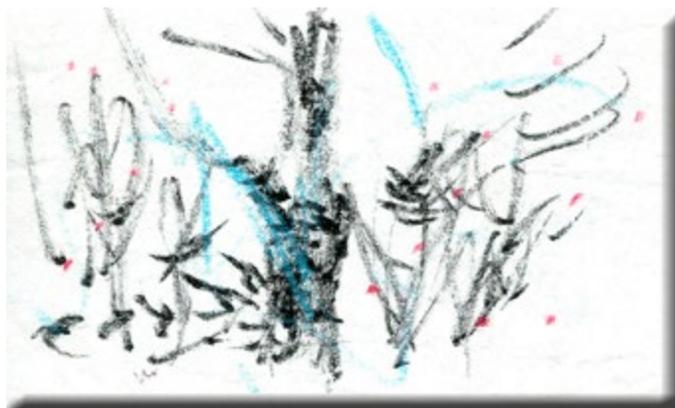
白犬の日向に伏せり梅林 佐藤喜孝

浅春のひがきらきらととび交へる

(昭和38年3月 水音)

あを

二 月



浅漬や仲よくしてる 死者生者
十二月八日と思ふ 晝すぎに
テロリスト北風吹く 蟬の穴あまた
門付が春のをしへを 賣りにくる
これでもかかと 門田盲矮塵芥蟲

晝すぎ

佐藤喜孝

☆

赤座典子

ただいまとマスクをはづすお父さん
北風吹きて袋小路の落葉色
寒燈やウインナワルツに長湯する
幸せは鮎鱈鍋の湯気の中
冬萌や門前の小僧歌うまし

冬座敷今宵の客はふたり連れ
鱈酒に身ぶるいしたる好好爺
不機嫌の夫へ差し出す玉子酒
生姜湯をいやいや飲みて早寝せる
塩鮭の吊るされし目は宙にあり

塩鮭

秋川泉

廬山居太龍・笏蛇

動石上井

常境椿花居士の村冬しづか
色変へぬ松と出迎ふ母娘
赫々と囲炉裏の炭や父子の廬
後山かな根深く立てる冬櫓
やや褪する龍太の籠よ吊し柿

真観院 俳道椿花 蛇笏居士(蛇笏)
龍泰院 観照常境 俳壇居士(龍太)

晦日や畳目に沿ひ拭掃除
紫の座布団贈る漱石忌
俸給の有りし日懐かし師走かな
パスタ茹で蠟燭灯し降誕祭
初日の出年輪きざむ二人かな

晦日

大日向幸江

☆

斉藤裕子

尾の先で返事する猫小春の日
寒雀窓に張りつく尾振猫
北風や目だけ出したる自転車乗り
卯酒布団の中で読む句集
高窓の見送る猫や年の市

北風や木々のうしろの虚言癖
長庚や月の真近で恋心
新月を盃にのせ掌にのせ
二合半こなからをまはし呑みする炬燵かな
漫ろ雨露をため込む破れ蓮

寒

佐藤恭子

行く年

七郎衛門吉保

悪しきこと良きこともある年の行く
安保法 T P P と年の逝く
行く年や句と遊ぶメモ枕元
画家とモデル画展にをりて冬温し
オホーツクに北寄りの風一人旅

門といふをんなの形見衣更

ベジタリアンの曾祖母「門」や胡桃味噌

だうしたやら深き傷ある木の榎植

コンビニエンスストア植込みの冬の蟲

裕子さんとコーラス乳房暖かし

門

篠田純子

冬ごもり

定梶じょう

湯どうふはもめんが好きで山に雪

信号が塞いで白息同じうす

ポケットのなくて手が暇日向ぼこ

凍てをれば斎場どつと人出て来

冬ごもり時計はむかし家にひとつ

妹よ 柚子の実落とす 那須廬
家出 犬首輪し っかり 柚子は黄に
もう 五年夢追ひ かけよ 日記買ふ
訳ありの 林檎を 割れば 蜜溢れ
極月の 百合描く 壺や 友逝けり

柚子

須賀敏子

渡瀬

竹内弘子

しぐれ忌の 灯にいきいきと 諍はん
水都古河露路 くらく 冬の月 大き
田中正造斃れしは ここ 蘆枯れる
むしろ旗進むがごとくに 蘆枯れたり
枯れ枯れて 鯨の血のみ あたたかき

柿紅葉 桜紅葉とつづく坂
いま置きしものを探して日の短
北風や幼稚園まで手を繋ぎ
羽子板市人出の上に月のあり
浮雲や姑と白菜漬けしこと

北風

田中藤穂

枯葉

長崎桂子

敷く枯葉踏む音楽し散歩かな
捨つるに惜し緋色濃淡櫛もみぢ
構はずに信号過ぎる枯葉かな
冬薔薇園色と香りに徘徊る
年つままる外の流しに半日を

買ひ置き蜜柑も切らし常備薬
にこにこことメニユーと共に雀瓜
蠟梅や今年伯母の十三回忌
みかん熟る蜜柑畑はみかん色
脚を挽ぐ会話途切らせずわい蟹



みかん

森 理 和

一月作品より

篠田純子・佐藤喜孝

朝酒の抜けきしところ初雀

佐藤 喜孝

豚汁にきりりと泳ぐ大根の葉

赤座典子

元旦の朝、お屠蘇を召し上がり過ぎたので
しょうか。作者は炬燵でうたた寝。ひと寝入
りしたら酔いも醒めて、初雀の声を聞く。と、
「あゝ、正月だなあ」ゆったりとした気分にな
ります。「さあ、飲み直そうか」と立ち上がる
作者の姿が見えます。(純子)

寝ころんで酔のさめたる卯月哉 正岡子規

晩秋や音の無い夜の空気圧

森 理和

虫の音も聞かれ無くなった晩秋の夜は耳が
キーンとなるほど静かです。飛行機の中やエレ
ベーターの中で、感じるような空気圧をキャッ
チした作者の感覚に共鳴しました。(純子)

大根の葉の「きりり」との表現に、新鮮な野
菜のみずみずしさが伝わってきます。刻んだ大
根の葉を鍋に放つ瞬間、発光したみどり色が人
参の赤、豆腐の白と映えあいます。素材を活か
しきり、棄てることなく食べきる作者のポリ
シーも、伝わる一句と思いました。(純子)

テレビでは食べ物の印象を伝へる職種の人を
よく見る。グルメレポーターといはれる人たち
である。食レポともいふ難しい仕事である。美
味しさうに食べる顔をテレビでは大写しにし、
気の利いた印象を述べる。大分前、著名な某料
理人がおいしいおいしいとあるファーストフー

ドを誉めちぎった。後日機会があり口にしながら首を傾げた。掲句の食レポ俳句は、なかなか美味しさうである。椀のなかで熱々の汁が対流してゐる。＼キリリ＼といふ擬人化に思はず頬笑んでしまった。

食レポ俳句を探したが*

美しき緑走れり夏料理

星野立子

運ばるる氷の音の夏料理

長谷川權

どぜう鍋薬味の葱は木の升に

田中藤穂

立子句を見つけて驚いた。拙句の「白を食し翠のこれり夏れうり」が恥ずかしくなった。(喜孝)

日向ぼこ合掌する身温もれり

秋川 泉

作者は日当たりの良いところで、腰掛けて休んでいるようです。「あゝ、楽だわ。ありがたい」感謝の気持が合掌となります。ここが泉さんの特徴です。勤労に耐え得る健康、日輪に対する

畏敬など、普通の人には気づかないことへ感謝できる作者は、とてつもなくスケールが大きいのではないのでしょうか。しかし、「温もらない日向ぼこがありますか？」と言う先生も世の中にはおられますへでも私はこの句すきです(純子)

知らぬ世へ招く雪吊並木かな

井上石動

いつも見ている並木も、雪吊をしたら、随分と変わった印象を受けることでしょうか。私なら驚きと興奮で小躍りしてしまいます。作者の「知らぬ世へ招く」は現世と異次元を提示していて、その感覚が新鮮に思えました。(純子)

三味の音を好む人居り冬座敷

大日向幸江

私は若い頃、よく三味線を弾いた。主人はどの曲も同じに聞こえて、眠くなる。との反応だっ

た。長火鉢に掘り炬燵、まる窓の小座敷で、三味線のお稽古をしたくなるような一句でした。

(純子)

術後の猫をそつとと抱く小春の口

斉藤 裕子

手術後の猫を、そつと抱くではなく「そつとそと」との表現。「頑張ったね」でもお腹にホータイと、首にカバーをかけられいつものマサムネちゃんではない様子です。怖々としかし優しく抱きかかえる作者の表情には、無事に手術の済んだ安堵も感じられます。小春の日の季語に良く合っている一句と思いました。(純子)

天道ほこり猫のころがるアスファルト

佐藤 恭子

天道ほこりが、日向ぼことは知りませんでした。子どもの頃よく、「おてんとさまが出てるよ」なんて言ってたかしらと思い出しました。アス

ファルトが良い具合に暖まった頃、体格の良い猫が「ドサツ」と寝転びます。そしてゴロゴロ何度も寝返りして、欠伸をしたり。そのうち毛づくろいを始めます。その様子を日向ぼこの真最中の作者が見ています。(純子)

北風や軒の雀の二羽足らぬ

篠田 純子

雀の群はどうして形成されるのであろうか。軒に北風を避けてゐる雀の群は純子さんには顔なじみのやうだ。よく見るといつもと違ひ二羽足りない。餌の少ないこの時期、なんかかかんと案じてゐる作者である。(喜孝)

一人行く雑木紅葉のしやりちやりしや

七郎衛門吉保

雑木林ですから、朴や桐の様な大きな葉も紅葉してますし、楓の葉やら銀杏の葉も紅葉している道を一人で作者は歩いていきます。葉は散り

かけていて、踏むと桐の葉はしゃり、楓はちゃり
りと楽しい音がします。独創的なオノマトペが
楽しいとおもいます。(純子)

いま、「日本語オノマトペ辞典」を開いてゐる。
野暮だが牽いてみる。

「しゃり」は、薄くてかたいものや、小
さくてかたいものがこすれ合う音を表す。
また、ややかたいものを刃物などできざ
んだりするときの音を表すこともある。

清涼感や爽快感を伴う表現である。」

とある。辞書を牽くまでもなく掲句の「しゃり
ちやりしゃ」は美事に種々の紅葉を踏みしだく
音を活写してゐる。この音により、晴天の紅葉
の中を、心も軽く歩く作者がゐます。(喜孝)

のら犬の秋愁今も首輪して

定梶じょう

のら犬を見て作者が秋愁を感じたと、解釈し
ました。犬の身になれば、かつての飼主が首輪
を買ってきてくれた日のことは、昨日のように
覚えている。「そんなに尻尾振ると千切れるぞ」
笑い声がありました。事情がりのら犬になっ
た今、古い首輪は愛されていたことの証、矜持
なのです。(純子)

どちらかと言へば熟柿の方が好き

須賀敏子

熟柿は、私もだいすきです。柿を二つに切っ
てスプーンで食べています。一方、柿は「固く
なくては」とアンチ熟柿派もいらっしやいます。
この句の「どちらかと」の使い方が良いと思ひ
ました。省略が効いていると思ひます。(純子)

熟柿啜る彼女の顔を見てしまふ 長浜徳三

鱧なます夫には夫のたびごころ

竹内弘子

我が身に引き寄せて、鑑賞させていただきました。鱧が出てくる旅は京都辺りでしょうか。幕末物の歴史小説ファンの主人。わたしは源氏物語。行先がどうのと、私達の旅行は喧嘩になります。取りあえず美味しい物を食べた落ち着いて、見逃した所は又、次回にと言う事になります。(純子)

ころがりし消しゴムも持つ冬の影 田中藤穂

我が家は東南向きで、一月の朝日は、何度かですが、反対側の玄関のドアにまでさしこみます。作者が転がしてしまった消しゴム。拾おうとしたら想定外の長い影を引いていて、作者は季節を視覚で強く感じます。(純子)

邪魔な葉を剪れば飛び立つ秋の蝶 長崎桂子

作者にとつては、邪魔で気になって仕方ない

庭の葉があります。「剪つてしまえばサツパリするわ。」と思いたちます。パチン、パチンと鉄を使っているとふいに蝶が舞いとび、作者を驚かせます。「ごめんなさい驚かせてしまって。悪気は無かったのよ。」と蝶に声を掛けますが見失いました。作者の繊細な感性と、どこか頼りなさ気な秋の蝶とが、寄り添う一句と鑑賞いたしました。(純子)

着飾りしをみなのごとし冬紅葉 長崎桂子

をみなのやうな枝振りの樹形を思つてみる。現の紅葉づる葉を友禅模様に見立てさせるやうな木の姿なのである。冬紅葉のうつくしさをこのやうに表すことが出来るのも「紅葉冬」に挑まれた好結果である。(喜孝)

前月抄

朝酒の抜けきしところ初雀 佐藤喜孝

晩秋や音の無い夜の空気圧 森理和

豚汁にきりりと泳ぐ大根の葉 赤座典子

日向ぼこ合掌する体温もれり 秋川泉

床に響く硬貨一枚西鶴忌 井上石動

賀状書く青いインクで書きあげる 大日向幸江

猫にもすなる避妊手術や神無月 齊藤裕子

天道ぼこり猫のころがるアスファルト 佐藤恭子



一人行く雑木紅葉のしやりちやりしや

七郎衛門吉保

北風や軒の雀の二羽足らぬ

篠田純子

身に入れり嗽ひはあふがねばならず

定梶じょう

貴船菊しつかり咲いて散りにけり

須賀敏子

泳ぎ子にさいかちの枝伸びきりし

竹内弘子

ころがりし消しゴムも持つ冬の影

田中藤穂

邪魔な葉を剪れば飛び立つ秋の蝶

長崎桂子

着飾りしをみなのごとし冬紅葉

長崎桂子

喜孝 抄



まいま

比来披見

沖 一月号

空想の奥へ奥へと大根干す

能村 研三

雨月 一月号

紅葉散る句碑取り囲む人に散る

大橋 暁

槐 一月号

秋の灯に影を積み上げ古本屋

高橋 将夫

馬酔木 一月号

冬菊の日向日向を祠まで

徳田千鶴子

風土 一月号

金銀のさざ波うまる初茜

神蔵 器

京鹿子 一月号

新海苔や東京湾に橋ふたつ

鈴鹿 呂仁

六花 一月号

元旦や播磨風土記の国に住み

山田 六甲

鳴 一月号

菰卷の松や父ほど重かりき

井上 信子

色濃かるらむ辺境の秋桜

高橋 道子

空 63号

遠目して遠出せぬ母屋の虫

柴田佐知子

万象 一月号

縄文の発掘決まる芋畑

大坪 景章

春燈 一月号

酔芙蓉夕日の朱ケを誘へり

安立 公彦

峰 一月号

いささかな御降りなるも目出度けれ

布川 直幸

やぶれ傘 八七号

タンゴ聴く夜はストーブの火を強く

大崎 紀夫

末黒野 一月号

丘包む風に遅れて降る木の実

小川 玉泉

書に倦むや檸檬の香り手に包み

松本三千夫

萱 二月号

築裂ける音さばしるや炉火たけて

木村 嘉男

酔うて寝て雪の降る音聞き洩す

亀田虎童子

曲り角いくつも曲り近松忌

小島 良子

佐藤喜孝抄



俳境流連

露味噲や胃の腑静かに引き締まる 純子

冬は苦手な季節だ。冷え症でちぢこまつて動かないものだから食欲がない。

有楽町の交通会館には「むらからまちから館」と言う全国各地の名産品を扱うお店がある。魚介、乾物、菓子、酒……。中でも野菜、果物は珍しい物、ポピュラーなものが、北から南からと集まっている。里芋は新潟産でねっとりしている。

交通会館の地下には又、和歌山県のアンテナショップがある。ここでも野菜を買ったり梅干を買った。露の臺を見つけた時は迷わず買った。天ぷらにして食べたなら元気が出た。炊きたてのご飯に露味噲を載せると二杯はいける。化学的なことは解らないが、胃液が出易くなるのだろうか。旬のものの力か

な？

そろそろ露の臺が出てくるころ、交通会館に食欲を探しに行こう！ この年の暮にね。

花鏡灰とゆれぬし井の頭

恭子

新潟から東京の三鷹市に移り住んだ。母の親代わりのおばあさまの紹介で家を建てました。

それが井の頭公園のすぐ近くでした。慣れない環境にもかかわらず中学生にとっては、新しいところは物珍しく生き生きとしておりました。新潟市の繁華街に住んでいたのですが、いかんせん言葉の訛りは有るものです。それもあまり気にしなかったようです。

春ともなると、井の頭公園のボート場は親子連れや、若い人達の賑やかな声声が楽しそうに広がっていました。

さくらの季節には夜会社からの帰宅は吉祥寺から

井の頭公園の真ん中を帰るのですが、それはそれは賑やかなものでした。時には一升瓶を投げられたこともありますが、公園の真ん中に交番があるので、安心していられます。

実家も転居してしまつたので、なかなか公園に行く機会が減りました。久しぶりで神田川のもとを訪ねたときのこと、昔桜の花びらで池の水が染まつていた時のことを思い出した。なかなか中野から近いのに行けないでいます。

今年あたりは、散る桜でも見に行きたいものと思つています。

唇を浮かして食ひし餡ころ餅 裕子

餡ころ餅というと、外側に餡をつけた餅のことらしいが、私の田舎では、餅の中に餡子を入れたお餅も餡ころ餅と呼んでいた。お正月の餅搗きの時、お

供えの丸いお餅や伸し餅の他に、中に餡子をいれた丸餅も作ってくれるのが、子供達の楽しみだった。搗き立てのお餅で作った餡子いりのお餅は柔らかくて最高のお八つだった。しかし、すぐ固くなる。次の日になると、網の上で焼いて食べる。お餅が焼けると、ふうふう吹きながらこれを食べるのだが、気をつけないと、中の熱い餡が飛び出して唇にくっ付き火傷しそうになる。焼き直して食べる餡ころ餅は唇を浮かして食べる、これは私が小さい時に習得した奥の手である。

餅搗きといえば、いつも親戚が父の本家に集まり、親戚の家のお餅を皆で搗いていた。朝から大人、子供、皆が集まり賑やかなものだった。庭に据えられた大きな竈に、お湯を張った大きな釜、その上に何段にも重ねられた木の蒸籠。薪を燃やし、蒸籠から蒸気がもうもうと上がり始めると、大人達の動きが忙しくなる。やり手の伯母の号令で餅搗きが始まる。父達が杵をふり、母達が手返しをする。搗き

上げられたお餅は、粉を振った箕に入れて、土間の
中へ。家の中には女衆。長老のお婆ちゃん達が餅を
千切り、母や叔母、年上の従姉妹たちが手際よく丸
めていく。年かさのいかない者は、次の準備をし
ている大人達を遠巻きに見ながら、時々蒸籠の簀の
子にくっ付いて残っている、蒸し上がった餅米を食
べさせて貰う。餡を餅でくるんでは、親指と人差
し指の間から丸い形にして押し出すお婆ちゃんたち
の器用な手元を見ると、とても不思議で面白
かった。

遠い日の良き思い出である。

老いて手をつなぐ野道や日脚伸び 桂 子

一月も中旬をすぎると少しづつ昼間が長くなり、
日差しも部屋の奥の方へ届くようになります。その
時季になると、近くの堤防を散歩する人も増えて来

ます。

まだまだ残っている田畑の間道を、老いたご夫婦
のどちらかが病み、お身体の御不自由になられ
た方を、健全な連れ合いの方が支えて、ゆつくりと
土を踏みしめていらつしやるのに出会い、会釈を交
わし微笑ましく、とても温かい気持ちになります。

きがつけばとしよりばかり春の昼 喜 孝

拙著『青寫眞』の古い句である。今は懐かしい『暖
流』の相模湖吟行に出句した。直接ではないが先輩
たちへ先輩しか居なかったが、がわたしたちのこと
だと響感を買った。微塵もそんな考へで作ったので
はないので驚いた。作意はふとその時わたしの四、
五十年後を想像したのだ。なぜだか分らないが外光
の明るさのゆゑかもしれない。いま読み返せばやは
り誤解をうけさうだ。

その帰り、大先輩のK氏にすすめられ東京までK氏の自動車に乗せていただいた。話をしたこともない大先輩なので驚きうれしかった。東京までの長いドライブの間、この句の弁解などしたはずだがなにも覚えてゐない。

それから十数年後、老年になった時の思ひ出話づくりにと同誌の同年配に声を掛け会を作った。いろいろな企画で楽しんだ。瀧先生や高島茂宅にも大勢で押しかけ酔いつぶれたりもした。暖流廃刊でこの「うの会」の会員もそれぞれ場を求めて散じた。その後のホローもわるく友達づくりに失敗した。男友達はだうも作りにくい。しかし暖流以後いつも傍らにゐてくれる女性の俳友がある。「うの会」の会長が夭折した葬儀の時、あなたが死んだ時泣いてあげるといふはれた。いまふたりは生き比べの最終コーナーに入つてゐる。

鎌の先ざくざく草石蚕掘り出され 幸江

お正月の食べ物の内で、私は一度も口にした事がない黒豆の上に散らせた草石蚕は、子供の頃は虫の死んだ物と思つていた。ある年の暮テレビで草石蚕の産地として北関東が出た。農夫の桑の先、ひと掘りごと草石蚕が手を繋いだよう出てくる、なんだ植物なんだ、私は一安心。今まで黒豆を煮ても草石蚕は散らさなかつた私、二三年前前からスーパで買う、でも子供の頃の思いで草石蚕は口にしない。多分これからもね。



田中藤穂

深爪のまだ痛むなり蜜柑むく
猫抱くや浅間嶺は今日雪降ると
物忘れ風邪のせいにし紅を引く
十二月混む仲見世の善哉屋
ペンキまみれの塗装屋二人年つまる

ペンキまみれの塗装屋二人年つまる

藤穂さんはもともと、一句にことばをつめ込む、ということ余りしない作者ではなかったでしょうか。ペンキ塗れをどうしても言いたかった



たということでしょうか。しかし、ペンキ屋塗装屋と言えばもうペンキに汚れていること想像できる筈。ここはへペンキ屋の二人に年のつまりけり。軽くなるかもしれませんが。

長崎桂子

凧や庭は周章狼狽す
落葉掃く葉脈きれい自然界
母子連さざんかの垣童歌
店頭にポインセチアの真盛り

店頭にポインセチアの真盛り

「も・に・ば」という「ことば」があります。初心の頃に教わりいまだになるほどと時々思う、助詞三つを列ねたことば。

正岡子規が『も』を遣うのは嫌味である」と述べたのにあやかり、「に」を遣うと説明くさくなり「ば」を遣うことは理屈つぼくなる、という謂いなのです。

それに従えば「店頭に」は説明くさく聞こえる、と言える。ここは重



点を中七以下へ移動させるためにへ店頭のポインセチアが真盛り〳〵したい、と。但し「も・に・ば」、遣つてはいけない、ということではない、遣う時は気をつける、ということなのです。

森 里和

古里の駅は無人に十一月
改札の出入りは無言水仙花
駅前の足湯にひと息山紅葉
ふりそそぐ冬の星空無人駅

古里の駅は無人に十一月

「駅は無人に」とあります。今は無人駅になってしまった、ということでしょう。過疎のわびしらも十一月となればひとときわ。

改札の出入りは無言水仙花

なるほど改札口ではまず無言。瓶の水仙花。



篠田純子

義士の日と云うて一升空けるなり
義士の日の線香のけむ泉岳寺
義士の日や朝から続く胸騒ぎ
義士の日やあれはテロかと考へる

義士の日やあれはテロかと考へる

不謹慎なこと思わず笑いだしてしまいました。そして考えてしまいました。テロとはある点で相対的であるかも、と。

詠みての純子さんは無論われわれもこの句を大切にしなければならぬ。

因みに先月号の純子さん句（行く道は下流老人新ばしり）。「下流老人」は、書名と知りました。それでどうか「行く道は」の意味は理解できましたが、新刊書を読んでいないと解らぬ、というのはいはりまずい。

赤座典子

雷門世界に冠たる冬着満つ

菰巻を結ばれ粹に男松
作られし青空に冴ゆ天安門
冬茜富士を愛せし人であり

雷門世界に冠たる冬着満つ

「世界に冠たる」は「雷門」にかかるのでしようが「冬着」にかかる、
ともとられ兼ねない。「冠たり」と。

菰巻を結ばれ粹に男松

現在はこちらの場合「菰巻を」とすること間違いとはしませんが、少
し以前は「菰巻が結ばれ」とするのが普通でした。

七郎衛門吉保

柿右衛門白磁素肌の冷たさよ
冬の床スマホにて聴く羅生門
冬競技赤青旗門潜り継ぐ
門限に急ぐ少女の息白し



柿右衛門白磁素肌の冷たさよ

陶磁器のことほとんどわからないのですが、有田の窯の作品は見たことが何度かあります。といっても素人であることに変わりはないのですが、磁気の釉薬の白さには独特の趣があつて、色絵を支えているのではないのでしょうか。それが「白磁素肌の冷たさよ」なのでしょう。

冬競技赤青旗門潜り継ぐ

上五「冬競技」の措辞はいささか無理があると思います。

あるいは「赤青旗門潜り継ぐ」も、スキーかスノウ・ボードかはともかく、滑降競技の緊張感が欲しい。〈ゲレンデの今一旗門通過せり〉。

秋川 泉

Tシャツで遊ぶ子供ら冬ぬくし

花柄と縞柄並べ冬衣

着古してまだ捨てられぬ冬の服

入日受けちうすでひらく甘蔗の花

Tシャツで遊ぶ子供ら冬ぬくし



いささか当たりまえに過ぎるのではないでしょうか。

花柄と縞柄並べ冬衣

和服もよく着たむかし、洋服は冬服、和服は冬着、冬衣と言う、などと歳時記にはありました。掲句、だからどうしたんだ、ど意地の悪い評者なら言いそうです。

着古してまだ捨てられぬ冬の服

この句も初句と同様当りまえに過ぎる、と思います。
これから以下に書くことは、先ごろ井上石動さんに教わった、句作りの要諦、と言っていることがら。といってもそんな難しいことを言っているわけではありませんけれど、参考にはなる筈です。

江戸中期の俳人・大島蓼太に

ものいはず客と亭主と白菊と

があります。アメリカの詩人ケネス・コックという人がこの句を「みんな黙っていた／客も主人も／そして白菊も」と訳して、ニューヨークの小学校の児童に、「ひとつだけ意外なものを入れよう言葉を並べてもらいなさい。この詩（俳句）では『白い



菊』がそうです」と言い、「このようにへ私には三人の友達がいる／ジェーンとサラと／楓の木」と書けば面白い詩になります」
……
と教えたそうです。

泉さんの掲句。意外さがなかつたために凡句になったわけで、例えば「Tシャツ」を意外性のある措辞にもってゆけばいいわけ。へTシャツの子と公園の冬日向へなどのように。

佐藤恭子

猫はしる背のみぢ葉落ちもせで
八角四角ビルの谷間の日向ぼこ
池の松乱して鴨の番はや
兩重し駅へ逃れし紅葉狩

八角四角ビルの谷間の日向ぼこ

四角の形のビルにしか馴染まない私には、テレビの画面等で見る何とも複雑な建物の外形をみるにつけ、建設費が高くつくだろうに、なぜ



と余計な詮索をしてしまうのですが、昔流の四角形のビルの方が新築では少ないかもしれないのです。それも階層が高くなればなる程外形が複雑、というより煩雑になってくる。ふしぎなことです。

そんなビルの谷間で日向ぼっこをするのも、あるいは悪くない。

池の松乱して鴨の番はや

結句の「はや」は「早や」なんでしょうか、終助詞の「はや」でしょうか。「早や」でしたら「到着草々に」という意をとり込まなければなりませんし、助詞「はや」だったら「鴨の番いであることだなあ」と鑑賞することになる。少しの差ですけど読み手として気になるところ。

須賀敏子

満月が分け隔てなく聖夜かな

那須 凧 家敷 一面 杉 落 葉

レジの人選んで並ぶ十二月

数へ日の鍋はとろ火に季寄せかな

那須凧家敷 一面杉落葉



中七の「家敷」はなくても宜しいのでは？へ那須風ありし一面杉落葉。

レジの人選んで並ぶ十二月

私、スーパ―にアルバイトで勤めたことがあって、レジを選んで並ぶのはまづ仕事が早く愛想のいいひと、次に若くきれいな人、となるでしょうか。師走となれば一層そうなのでしょうね。

佐藤喜孝

耳鳴りがするほど冬の月織し

本当の銃音みかんとNHK

熟柿あり上手に嘘をついている

大枯野うごくところを見てをりぬ

雲を吐くよはひとときづく牡丹櫛

耳鳴りがするほど冬の月織し

私の記憶では、へガリ版は月の光を刻む音 喜孝が あって、喜孝さんは月光に殊のほか耳目が聡いかたのよう。それも「織月」とありますので音楽家のごとき繊細さを持ってらつしやるに相違かい。ガリ版の句



では月光を音にかえた、耳鳴りの句では織月の鋭さから耳鳴りをを導いた。繊細さ。

本当の銃音みかんとNHK

我々が聞く銃砲の音は、以前は大概ドラマの中のもの。それが近頃のものとは真正正銘、ほんまもん銃声。恐ろしいことです。そんな画像をお茶の周でテレビを通して見ている、と。みかんを頬ばりながら。

熟柿あり上手に嘘をついている

「嘘」は、上手につけばつく程気を張りつめなければならぬ。ばれることを承知の嘘ならともかく、そうでなければその間、神経を張りつめなければならぬ。嘘をつかなけりやよかった、と思うのはこんな時だ。

で、「熟柿」。果肉が熟しきって一枚の皮でかろうじて支えている、そんな柿はひと突つきすれば破裂しそうだ。上手についた嘘がもつか、熟柿の破裂が先か。



あをキーワード俳句辞典(こくーこけ)

国技

国技館の弾けるちから梅雨重し

芝 尚子

国威

国威とは厄介なもの遠花火

赤座 典子

刻々

百態の芽吹き刻々髪を切る

森 理和

黒衣

炎天をゆく足ばやの黒衣かな

井上 石動

刻刻の色襲ねゆく秋の空

東 亜未

虚空

枯木立梢虚空を掴みをり

栢森 定男

刻々と西日の沈む車窓かな

早崎 泰江

羽ばたかず夏の虚空に美しく翔ぶ

吉弘 恭子

刻刻と車窓に迫る雪解富士

赤座 典子

蠟燭のほのめく虚空夜長かな

長崎 桂子

国産の食にこだはりラムネかな

森 理和

老犬のひるね虚空を蹴りつづけ

竹内 弘子

国籍

権利義務国籍放棄するか春

佐藤 恭子

雲黒

黒雲に押しつぶされて吊し柿

鎌倉喜久恵

古九谷

行秋や古九谷の蔓伸びやかに

赤座 典子

黒雲やうしろに隠る朧月

吉弘 恭子

国鉄

国鉄と云はなくなりし柿若葉

竹内 弘子

三輪山へ黒雲降りぬ糸とんぼ

田中 藤穂

黒糖

初秋や口いつばいに溶く黒糖

佐藤 恭子

黒雲をこはがる子供こぼれ萩

渡邊 京子

黒糖焼酎いかほど飲めば島人に

赤座 典子

黒雲に際立ちて揺る冬紅葉

長崎 桂子

国道

国道の真中に巡査夏休

佐藤 恭子

苔むして顔も分たぬ野分佛
一粒の琥珀の露や苔の石

栢森 定男
関口 ゆき

告白

告白の螺旋階段西日さす

篠田 純子

柔らかく苔波うちぬ初夏の寺
手に涼し苔にまろめる句碑の肩

早崎 泰江
渡邊 友七

告白は薔薇の真つ赤な日でありし

堀内 一郎

竹の奥時雨れて苔の墓いくつ

渡邊 友七

黒板

冬近し黒板は濃きみどりいろ

竹内 弘子

苔清水飛石をゆく路地草履

東 亜 未

黒板の長き受け皿夏休

佐藤 喜孝

露けしや二等兵いま苔むして
朽ち果てし大松の根に苔茂る

鎌倉喜久恵
篠田 純子

国宝

国宝の前の日向に長い猫

佐藤 喜孝

庭涼し市松模様苔と石

長崎 桂子

国宝の前の老松冬うらら

長崎 桂子

杉苔をとり込む根松の太き根

佐藤 恭子

高砂を謡ふ国宝夏袴

東 亜 未

春陰や蹲踞灯籠苔むして

芝 尚子

国民

入学す国民学校と名が変はり

竹内 弘子

霜柱持ち上げられし庭の苔

山莊 慶子

克明

新聞の克明な手記原爆忌

東 亜 未

杏の香屋根は苔むすやうに見え
法師蟬苔守り遅々と石と化す

鈴木多枝子
森 理和

克明な武士の家計簿枇杷の花

田中 藤穂

祖母坐る苔むす石に黄の小菊

斉藤 裕子

苔

苔むして顔も分たぬ野分佛

一粒の琥珀の露や苔の石

柔らかく苔波うちぬ初夏の寺

手に涼し苔にまろめる句碑の肩

竹の奥時雨れて苔の墓いくつ

苔清水飛石をゆく路地草履

露けしや二等兵いま苔むして
朽ち果てし大松の根に苔茂る

庭涼し市松模様苔と石

杉苔をとり込む根松の太き根

春陰や蹲踞灯籠苔むして

霜柱持ち上げられし庭の苔

杏の香屋根は苔むすやうに見え
法師蟬苔守り遅々と石と化す

祖母坐る苔むす石に黄の小菊

祖母坐る苔むす石に黄の小菊

祖母坐る苔むす石に黄の小菊

祖母坐る苔むす石に黄の小菊

創刊号は1978年
定価1000円(税別)

月刊

俳句界

2016年3月号

目次

俳句を考える

- 藤しとは何か? 大橋晴家
- 江戸俳句と俳 木暮樹句郎
- 明治大正俳句と俳 今泉誠弘
- 俳句の俳句と俳 依田香月
- 五七五俳句と俳 日下孝由季

多量に俳句界NOW 大輪晴宏

【川】西池冬閑 島村正 堀地一雄

発表！ 第15回山本龍吉賞 第8回文章の賞賞

『俳句名句うらばなし』

！上女子同好の俳句をとりまわす！
中村草田男 後藤寂平 堀大欣 一保
孝七 石ノ森信雄 伊藤伊藤男

【俳句】 大竹多可志 「かひれ」

【俳句】 久保田万太郎



佐藤昌彦(日ノ下)シテハ！
阪本順治 (俳句)

俳句界 1000円(税別)
送料別

〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1 株式会社文学の森
 03-6262-9186 FAX 03-6262-9186 URL: http://www.jungku.com

新会員ご紹介

- 黒沢佳子 様 千葉県我孫子市天王台
 森 直子 様 大田区田園調布
 中川句寿夫 様 石川県輪島市門前町馬場

二〇一六年二月号

発行日 二月七日
 発行所 東京都中野区中央2-50-3
 電話 090-9828-4244
 ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット/松村美智子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)/一年

郵便振替 00130655526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。

